

1. 流域の自然状況

大淀川は、その源を鹿児島県曾於郡中岳に発し、北流して都城盆地に出、霧島山系等から湧き出る豊富な地下水を水源とする数多くの支川を合わせつつ狭窄部に入り、東に転流し岩瀬川等を合わせて高岡町に出、最大の支川本庄川を入れて宮崎平野を貫流し宮崎市において日向灘に注いでいる流域面積2,230km²、幹川流路延長107kmに及ぶ九州屈指の河川である。

その流域は、宮崎県の南西部に位置し、鹿児島、熊本、宮崎の三県にまたがり、5市16町3村が含まれ、社会、経済、文化の基盤をなしているとともに、流域の一部が霧島屋久国立公園、九州中央山地国定公園の指定を受けるなど自然環境や景観も特に優れていることから、本水系に対する治水・利水・環境についての意義はきわめて大きい。



図1-1 大淀川水系流域図

写-1



◀ 源流部

スギ・ヒノキ等の人工林で覆われた源流部。

上流部 ▶

周辺の山々に囲まれて上流域を形成している都城盆地。

写-2



写-3



◀ 中流狭窄部

都城盆地と宮崎平野の中間に位置し、日向山地と鱈塚山地に挟まれた中流域狭窄部。

下流(河口)部 ▶

沖積平野と洪積台地からなる、都市化の集中する下流域宮崎市街部。

写-4



1 - 1 地形

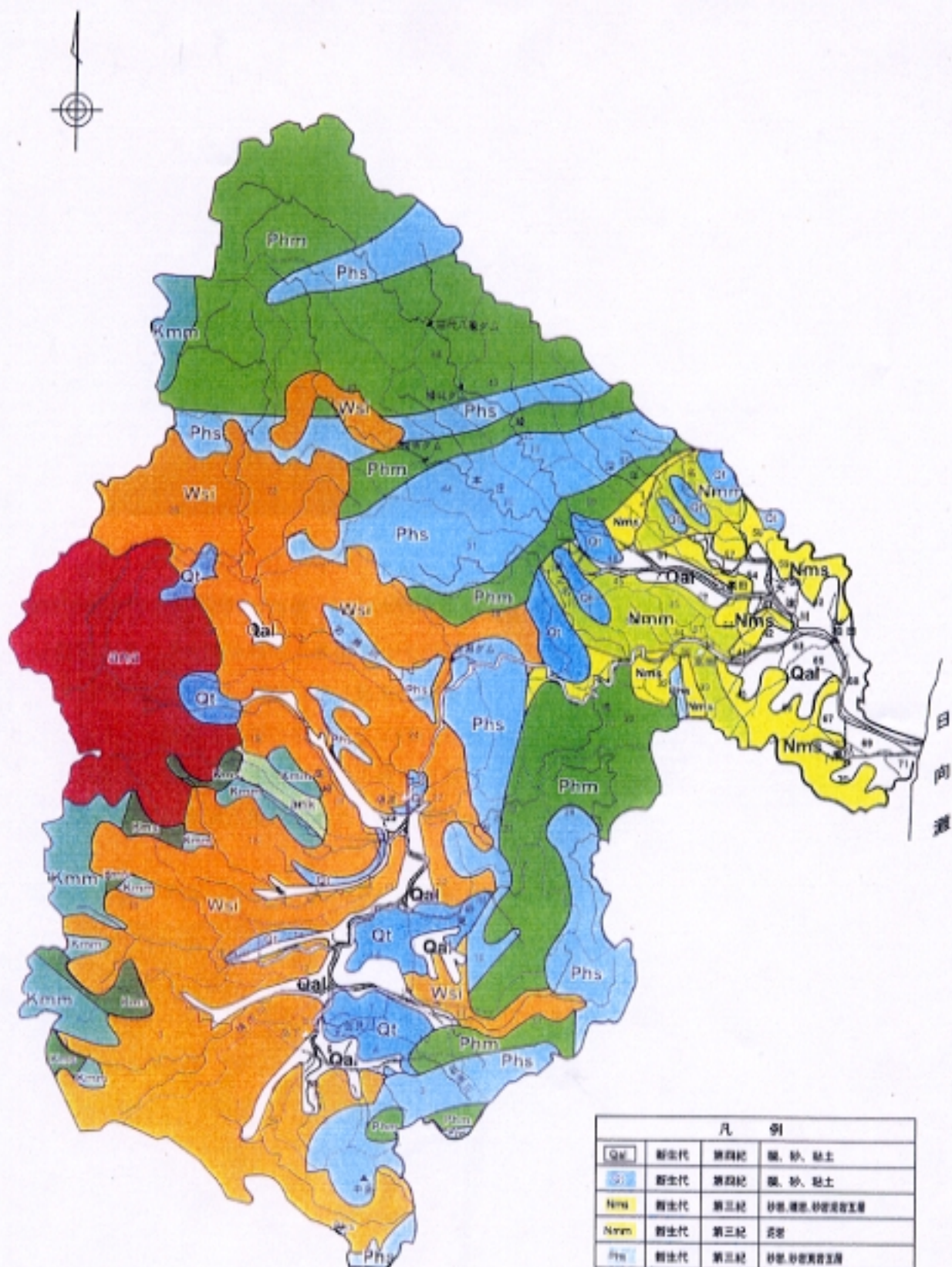
大淀川流域は東西約55km、南北約70kmで、やや長方形をなし轟付近の中流狭窄部を境とした上流域と下流域に分けられる。都城市を中心とした上流域の盆地は鱈塚山地と霧島火山部との間にあり、盆地内にはかなり広い段丘と沖積地とが発達している。大淀川は、その盆地内を流れる諸支川を合流して北流し、日向山地と鱈塚山地とがせばまる山間地の狭窄部に入り、高岡付近において宮崎平野に入る。

下流域は広い沖積平野を形成し、宮崎平野の主要部を成しており、北西から流下する本庄川を合流し、日向灘に注いでいる。

1 - 2 地質

大淀川流域の地質は、水源地帯では中生代の四万十層群が400m内外の山地を形成しているが、都城盆地は第三紀から第四紀にかけて霧島火山群が噴火した際に陥没して形成されたといわれ、その盆地底には沖積層が発達しているが、大部分は厚い火山灰で覆われ、この地域でシラスと呼ばれる軽石の粉末、安山岩の破片、礫等からなる地層を成している。この盆地に流入する諸支川及び岩瀬川はいずれも火山灰地帯を流れ河岸に沿って狭長な沖積層が見られ、高岡町から下流にいたっては第三紀層がみられ各所に火山灰をかぶっている。

一方、本庄川の綾北川合流点より上流及び綾北川は、中生代の四万十層群からなる険しい山岳の間を流れ、両川の合流点から下流に至り平地に出ている。図1-2でも明らかな様に、都城市付近のほか、広い範囲にわたりシラス層が分布している。



凡 例			
Qal	新生代	第四紀	礫、砂、粘土
Qt	新生代	第四紀	礫、砂、粘土
Nmm	新生代	第三紀	砂岩、泥岩、砂岩質頁岩層
Nms	新生代	第三紀	頁岩
Phs	新生代	第三紀	砂岩、砂岩質頁岩層
Phm	新生代	第三紀	頁岩、粘板岩
Wsl	中生代	白堊紀	砂岩、砂岩質頁岩層
Kmm	中生代	白堊紀	粘板岩、千枚岩
Qa	新生代	第四紀	玄武岩、輝石安山岩、角閃安山岩
Wsl	新生代	第四紀	シラス
Qal	新生代	第三紀	礫、砂、粘土、砂岩質頁岩層

注) 九州地方土木地質図

(九州地方土木地質図編纂委員会 (財) 国土開発技術研究センター作成) より

図1-2 大淀川流域地質図

1-3 気候

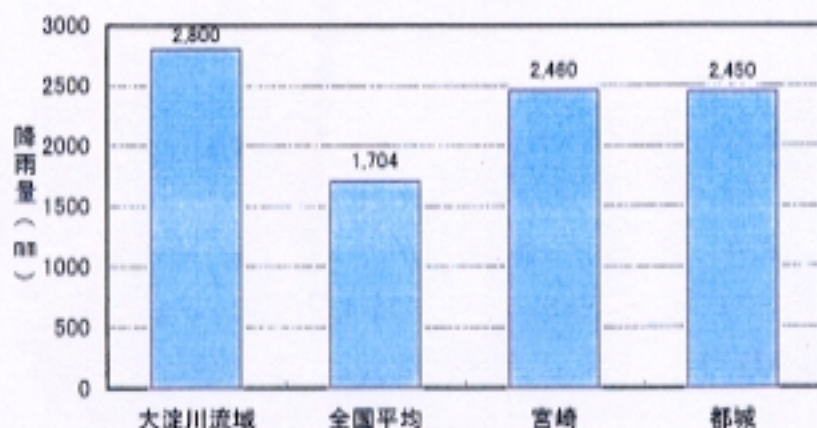
大淀川流域の気候は下流域が南海型気候、上流域（本庄川流域含）が山地型気候に属し、海岸地方では年平均気温が17℃内外であって、日本で最も温暖な地帯に属している。しかし、山沿いの地方では年平均気温が15℃以下となり、霧島山系のえびの高原では冬季の最低気温が氷点下20℃以下に下がることもある。

大淀川流域年平均降水量は2,800mm程度であり、鰐塚山系は3,000mmを超える多雨地域となっている。月別では6月～7月の梅雨期及び8月～9月頃の台風期に集中しており、特に台風が本流域に与える影響は大きく、既往の大出水のほとんどが台風によるものである。

気候区分図



年間降雨量の比較



注) 大淀川流域は、H2～H11年の10ヶ年（今回算出）
全国平均は、「理科年表」記載の全国主要観測所の平均値（S36～H2年）
宮崎、都城は、「日本気候表」よりS46～H12年の平均値